
ネットゲーム・クライシス

ハレクリシュナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットゲーム・クライシス

【Nコード】

N7843N

【作者名】

ハレクリシユナ

【あらすじ】

情報ネットワークが異様に発達した世界の話。高校入学直後、少年は部活の勧誘を受ける。しかしそれは、学校に認められていない非公式の部活動からの誘いだっただけ。その上活動内容は、オカルト方面でも有名な曰く付きの怪しいネットゲーム、『ネット・ファンタジー』を延々とプレイするというもの。そして少年は、否応なく巨大なネット世界の奔流にのみ込まれていく。(いわゆる普通のオンラインゲームのようなものではなく、ブラウザゲームにおける頭脳戦のようなもの)を描きたいと思います。内容について、厳しい批判

も大歓迎です。よろしかったら感想をお願いします)

第一章 序 夕暮れのパソコン室で

「紹介しよう、我が部活の新メンバー、林君だ！」

夕暮れ時のパソコン室で、眼鏡をかけた長身の男がかっこいいポーズを決めながら高らかに宣言した。まるで、新作の巨大ロボットを披露する博士のようである。

「いや、まだ入部すると決めただけじゃ……」

背の低い少年がおずおずと反論する。

それぞれパソコンの前に座った生徒二人がその様子を見ている。

「で、部長。彼はゲームのことは知ってるの？」

一番後の席に座っていた上級生らしき男が尋ねた。

「いや、まだだ」

部長であるらしい長身の眼鏡男が答えると、前の方の席に座った女子生徒が、「やれやれ」といった風に言った。

「相変わらず、部長の勧誘は強引だねー。その子も大方、『楽しくゲームをする部活だ』とでも言っただけで連れてきたんでしょ？」

「え？ 違うんですか？」

少年が訊くと、その女子生徒が立ち上がり説明を始めた。

「正確に言うと、この部活は部活じゃない。正式に学校から認められてはないのよ。それとあと二つ。まず一つ目に、私たちの目的は色々なゲームをプレイすることではなく、とある一つのゲームだけを徹底的にプレイすることなの。そして二つ目に、楽しくゲームができる保証はないわ。」

「ひどいな、上島さん……。少なくとも、僕は楽しくやってるつもりだ……」

彼女の言葉に、部長は苦笑いしながら抗議した。

「まあ、楽しいかはともかく、退屈しないのは確かね。ああ、それともう一つだけ。私たちは学校ではあまり評判良くないから、ホントに入部するつもりなら、あんまり青春とか期待してはダメ」

彼女は少し厳しく言い放つ。

最後部の席の男が付け加える。

「まあ、上島さんの言うことも間違っちゃいないけどね。ああ、でもこのメンバーで合宿行ったりはするし、それなりに面白い高校生活だと思っよ、俺は。合宿って言っても、パソコン室でもできることを旅行先でやるだけなんだけど。いや、そうじゃないこともあったか……」

「そうじゃないこと?」

「まあ、それは後で説明するよ。とりあえず、みんなが好きでここにいることは事実さ」

その男は意味深に笑いながら言った。

「ほら見ろ、この部活は面白い。　どうだ、林君。やっぱり入部するだろ?」

部長が詰め寄るが、少年は困っていた。

「あの、せめてそのゲームの内容を教えてください……」

「ああ、それもそうだな。　よし、斎藤、お前が説明してやれ」

「えー、何で俺?」
どうやら斎藤とは最後部の席に座っていた男のこのようである。

文句を言いながらも、素直に前の方にやってくる。さっきまで女

生徒が座っていた席のところ、少年を呼んで、パソコンの画面を見るように促す。

「画面にはオーソドックスなブラウザが開かれ、そこにウェブページが表示されていた。」

「これが俺たちのやってるゲーム。タイトルは『ネット・ファンタジー』。略してネットファンって呼ぶことが多いかな」

それは、今流行っているような綺麗な画面でリアルな人物が動き回るような、手間のかかったゲームではない。

「へー、これがゲームなんですか？　なんか普通のホームページっぽいですね」

「うん。ダウンロードとかするやつじゃなくて、ホームページ上でやるタイプのゲームだからね。ブラウザゲームって言うのかな」

「で、これが今いる場所を表すイラストで、こっちが今持つてるアイテムのリストで」

簡単な説明が終わる。少年は初め、そんなにクオリティの高いゲームではないと思っていたが、その認識はもう変わっていた。

ステージにしても、アイテムや敵キャラクターにしても、内容が膨大なのだ。それが画面には実に簡単な形で映し出されているが、これがそんな単純なものでないということは、少年には何となく分り始めていた。

「どうだい、ネットファンの魅力がわかったかな、林君？」

「はい。シンプルだけど、なかなか深いですね、これ」

林少年の感心したような口調に、部長は満足そうにうなずく。
「そうだろう。僕はもう一年以上やってるんだが、興味が尽きないな。このゲームに関しては」

そこで先程の女子生徒が口をはさんだ。

「部長の場合、単なるゲームの魅力ってだけじゃないでしょ？」

「ははは、まあそれもあるんだけどね、確かに」

「え、どういうことですか？」

少年の問いに、部長は気まずそうに返した。

「いろいろ、いわく付きなんだよ、このゲームは」

「いわく付き？」

「そう、怪しい噂が流れてるのさ。このゲームのトッププレイヤーが失踪したとか、あるダンジョンをクリアしたプレイヤーが発狂して精神病院に入れられた、とかね。まあ、いずれも噂話の域を出ない、都市伝説のようなものさ」

女子生徒がそれに続けて言う。

「このゲームが公開されたのは二年ちょっと前だった。私たち達はもともとオカルト好きで集まってたんだけど、このゲームの噂聞いて、部長がのめり込んでちゃってね。それで活動の一環として、みんなでこのゲームやってたんだけど、いつの間にかこつちが主流になっちゃって。でも、このゲームの裏には、本当に何かありそうな気がする。怪しい部分はあるし。」

「怪しい部分っていうのは？」

「ええ、製作者の素性は一切わからない。企業がやってるわけじゃないみたいなの。それなのに、例えば『どここのホテルからログインしろ』ってメッセージが送られてきて、数日後本当にそのホテ

ルの宿泊料と交通費が送られてきたり、個人運営ではちょっと考えられないことをやってるのよ」

「え？お金を送ってきたんですか？」

少年は驚いて訊き返す。

「そう、まあ一万円とか二万円とかそんなものなんだけど、それでも、このゲームは世界規模でプレイされてるから、相当なお金が動いてるはずなの」

「じゃあ、さっき言ってた合宿っていうのも……」

「そうね。そういった指令を受けて、何人かで旅行に行ったこともあったわね」

「それは確かに、何かありそうですね」

少年が神妙な顔で感想を述べた。

一方部長は、女子生徒の説明にさつきからしきりに頷いている。どうやらこの手の話が好きなようである。

「それだけじゃないぞ。そもそも、ネットフアンの特徴はデータ量があまりにも膨大なところだ。数々の攻略サイトが開設されてはいるが、それでもネットフアンの全容を明らかにするには至らない。もし個人や少人数のグループで運営しているのだとすれば、その能力は人智を超えてると言っていていい程だ。とにかくこれは、普通のゲームじゃあない」

「へえ。僕、オカルトとか興味あるんですよ。なんか、ますます興味わいてきたなあ」

少年がそう言つと、部長はこの上なく喜んだ。

「そうかそうか。いやー、君こそ我が部活にふさわしい。な、そうおもつたらろっ？」

「ええ。人材としては、悪くないわ」

「俺からみても、林君は十分やっていけるんじゃないかと思うよ」

場の雰囲気はもう、少年を部員にする方向で決まりかけている。

「よしよし。それじゃあ、林君。僕たちの活動について、少し見ていかないかい？」

「あ、あの やっぱり、もう少し考えさせてください。この部活に入るかどうか……」

部長は少し意外に思ったようだが、穏やかに返事をした。

「そうか。まあ、無理に頼むのも悪いな。じゃあ、気が向いたらこれを読んどいてくれないか」

そう言いながら部長は、プリントアウトして作ったであろう『ネット・ファンタジー入門』と銘打たれた冊子をカバンから取り出した。そこそこの厚さがある。

「僕が作った、初心者向けの解説書だ」

「部長は、こうやって自分でネットファンのデータ集とか作るのが趣味なのよ。メンバー共有用に、もう何冊も冊子を作ってるの」

女子生徒は、少し茶化したようにそう言う。

「もし面倒な時は読まなくてもいい。今週中に返してくれ。だいたい毎日、放課後は誰かがここにいる」

冊子を手渡される。少年は軽く頭を下げ、そのまま部屋を出た。

彼の去った部屋で、部長はひとり言のようにつぶやいた。

「あ、まだ部活の名前、彼に教えてなかったな」

その後、少年は帰路に就いた。歩きながら、まだ迷っていた。彼はもともと部活などするつもりはなかった。今日パソコン室に行ったのも、強引に誘われたからであった。

彼には、部活に入りたくない理由があった。なにより部活が、そして学校生活が怖かった。

しかしそれでも、このゲームには何か、底知れない魅力があった。少年は早くもその虜になりつつあったのだ。

『ネット・ファンタジー入門』 1ページ 基礎システム

ネット・ファンタジー（以下、ネットファン）を理解する上で欠かせない要素が四つある。アイテム、ステージ、状態異常、能力値である。ここではまず、上記の四つの関係を簡単に記述したい。

1、アイテム

これは間違いなく、ネットファンにおける最重要事項である。なぜなら、ネットファン内でプレイヤーができる行動はただ一つ、アイテムを使用することだからである。具体的な使用例を述べよう。

- ・ 『鉄の剣』を使用する 能力値『攻撃力』の値が40になる
- ・ 『北の地図』を使用する いくつかの表示された行き先から、一つ選ぶ キャラクターがそのステージへ移動する

また、特定の条件下で自動的に使用されるものもある。

- ・ 状態異常『毒』が発生する 『解毒草』を持っている 『解毒草』が一個なくなり、状態異常『毒』が消える

2、ステージ

キャラクターがどのステージにいるかによって、遭遇する敵や、入手できるアイテムの種類が変わる。

また、特定のステージでなければ使えないアイテムや、ステージによって効果の変わるアイテムも存在する。例えば、

- ・ 『謁見許可証』は王城ステージでしか使えない
- ・ 『買い物券』は、ステージによって引き換えることのできるアイテムの種類が違う

3、状態異常

主に戦闘などによって発生する。状態異常にも実に様々なものが

存在し、状況によって発生する状態異常は異なる。

- ・毒蛇の攻撃を受ける 状態異常『毒』が発生する
- ・麻痺キノコを使用する 状態異常『麻痺』が発生する

ネトフアンのキャラクターに生命力というものは設定されていない。その代わり、状態異常が四つ以上発生した時点でそのキャラクターは死亡したと判定され、キャラクターデータは抹消される。

4、能力値

攻撃力、守備力などがあるが、ゲームを始めた状態では能力値は何も存在しない。（処理上は全ての能力値を0として計算している）主にアイテムによって補正される。

例えば、攻撃力が存在しない状態で『鉄の剣』を使用すると、攻撃力という能力値が現れ、そこに40という数値が代入される。この状態で『鉄の剣』を失うと、攻撃力という能力値は再び消滅する。また、『鉄の剣』を使用し攻撃力が40の時に、攻撃力を35にする『銅の剣』を使用すると、足して75などとはならず、攻撃力は35となる。

これらは全て、ネトファンにおいては基礎中の基礎である。部活の一員として必ず正確に把握してほしい。

第一章 一話 学食会議

四限目が終了し、チャイムが鳴る。

少年は弁当箱を取り出し、昼食を食べる準備に取り掛かった。

彼は学校で、一人で弁当を食べていた。

難しそうな顔をして、いかにも何か考え込んでいるようなフリをして食事を始める。実際は、周囲の生徒達の楽しそうな会話に聞き耳を立て、過剰に他者を気にしながらの食事である。

普段ならこのまま素早く弁当を平らげ、今度は参考書を読むフリをしながら昼休みの残り時間をやり過ごすのだが、今日は違った。

教室のドアが開いたかと思うと、何者かが大声で言った。

「林君！ 林君は居るかー！」

生徒達の視線が、ドアのそばに立っている長身で細身の上級生に集中する。

男はインテリ風に眼鏡の位置を直す仕草を見ると、切りそろえた前髪を振りかざしながら左右をキョロキョロと見渡す。窓際に座る少年の姿に気づいた。

ズカズカと教室に入り込んで、少年の前までやってきた。

「おお、林君。そうだ、先日の入門書は読んでくれたかい？」

「あ、ああ、はい。もう読み終わりました」

そう言いながら少年はプリントアウトされた紙の束を取り出し、男に返す。

「ほう、仕事が早いな、林君。ところで、まだ春だというのにずい

ぶん暑いな。というわけで、今から一緒に学食に行こうか」「
自信に満ちた顔でそう言われても、何が」というわけで「なのかわからない。」

「えっと……僕は弁当なんですけど」

「そうか、だったら弁当持って行って、一緒に学食で食べよう！」
そこまで強引に誘われると、無理に断るのも興醒めである。

「はあ　じゃあ、分りました……」

結局少年は大人しく、部長を務めるその男についていく。

食堂は賑わっていた。少年にとってそこは、少し場違いな所であるように感じた。

大きなテーブルの一角で、すでに三人の生徒が待っていた。

そこだけ、他の生徒の集団とは少し雰囲気が違う。

それは、良く言えばプロとかベテランとかそういった印象であり、悪く言えば若者らしからぬ、くたびれた様子だった。

「よお、部長。それと林君」

「遅かったわね。待ちくたびれたわ」

まず口を開いたのは、一昨日パソコン室で会った二人だった。

「えっと、この二人はもう知っているね。斎藤と、上島さんだ」

「あ、はい」

「あと、こっちが檜山君だ」

紹介されたのは小太りで優しそうな顔をした男だった。

「ああ、きみが林君ですね。檜山です。よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

部長はさらに付け加える。

「檜山君は英語が得意なんだ。うちの部活には欠かせない存在なんだよ」

「英語、ですか？」

「ああ。もう知っているだろうが、ネットファンは世界規模で稼働しているゲームだ。もちろん日本人だけで情報交換しているコミュニケーションもあるんだが、高度な情報を手に入れるとなると、外国人とのコミュニケーション力は必須だね」

「なるほど」

「ちなみに、僕と斎藤は三年生。檜山君と上島さんは二年生だ。あともう一人二年生の女の子がいて、今は五人で活動している」

意外にも上島さんは二年生だった。その割には、どこか場を仕切っているような感じもある。

「さて、早速だが、学食会議を始めようと思う」

「学食会議？」

耳慣れない言葉に、少年は質問した。

「ああ、学食会議だ。週に三回、月曜、水曜、金曜に学食に集まり、会議をやってる」

「へえ。会議って言っても、何やるんですか？」

「まあ、基本はダベるだけだ。割と真面目に部活の今後の方針とかを考える時もあるし、そうでない時もある」

そこで上島が話に割り入ってきた。

「要するに、一緒に食事をすればオーケーよ。さあ、座って。ああ、それと部長。あなた早くしないと、そろそろスパゲティー売り切れるわよ」

「なに！？ クソツ、ぬかった！」

部長はクルリと向きを変え走り出したかと思うと、すぐに見えなくなつた。

少年は部長の後ろ姿を見送つてから、上島に示された席に座る。

「林君は弁当持参ね。それじゃ、私達だけで始めちゃいましょうか」

「おう。あ、そういえばさ、檜山。殺人鬼の件はどうなつた？」

「ああ、あと十一人ですよ」

斎藤と檜山の話についていけない様子の少年に、上島が説明する。

「殺人鬼っていうのは、他のキャラクターを二百四十人暗殺したキアラに贈られる称号のことよ」

「ええと。じゃあ、アサシンと同じようなものですか？」

少年の質問に今度は、ラーメンをすすっていた檜山が答える。

「よく知ってますね。アサシンは百二十人の暗殺に成功した段階で貰える称号です。だから僕はもうアサシンの方は持つてます」

「へえ。称号を持つてると何か特典があるんでしたっけ？」

「うん。アサシンになると、暗殺の成功率は上がりますね。でも、僕が暗殺やつてることが他のプレイヤーにはれちゃうから、良い事ばかりってわけでもないです。掲示板なんかでの批判も多いし」

「そうなんですか？ でもゲームのルールとしては、暗殺はやつていいんですよ」

「そりゃそうですね。ネットファンは基本的に自由ですから。禁止されてるのは、一人で複数のキャラを操作することぐらいじゃないですかね。それでも、アサシンは好かれることはないです。反感を買いやすいプレイスタイルですね」

そこで上島が口をはさむ。

「ただし殺人鬼は、オカルト方面のプレイヤーにとっても興味の尽

きない称号よ。殺人鬼の称号自体、簡単に手に入る物ではないのだけど、それを手に入れた一握りのプレイヤーもそのあとすぐにネットファンを止めてしまうことが多いの」
「なるほど、それは少し怪しいですね」

そこで、部長が戻ってきた。スパゲティの盛られた皿を持って
いる。

「お、部長。間にあったようだな」

「ああ。危うく失態をおかすところだった」

「ほんと、いつもスパゲティ食べててよく飽きないわね」

「ふん。飽きるはずもない。もうスパゲティが好き過ぎて、僕がスパゲティなのかスパゲティが僕なのか、分らないくらいさ」

意味不明なことを言いながら、席につき、早速スパゲティを食べ始める。

「そういえば今、何の話をしていたんだ？」

「檜山が殺人鬼になるまで、暗殺あと十一人って話だよ」

「ほう、もうそこまでいったか。ついにうちの部からも、殺人鬼が登場するかもな」

部長は思いつきりスパゲティを頬張り、一気に飲み込んでから話を続ける。

「そういえば今日は、多数決を取りたかったんだ。『樹氷の妖精』と『雪女』、皆はどっちが好みだ？」

「俺は雪女かな。寒いシチュエーションで、あの割と薄めの白い着物つてのが最高にキテると思うんだ」

「ふん。私は賛成しかねるわね。寒いシチュに最もマッチするのはロリに決まってるわ。というわけで、樹氷の妖精に一票よ」

「あの、僕も樹氷の妖精で……」
それが何を決める多数決なのかはよく分からないが、とりあえず
思い思いの回答をする。ただし少年は、樹氷の妖精も雪女も知らな
いので答えようがない。

「その、樹氷の妖精と雪女って、なんですか？」

そこで部長は気付いて、自分の携帯電話を開く。

「ああ、林君は見たことが無かったね。ええつと　ん？」

「どうした、部長」

なぜか顔をしかめた部長に、斎藤が訊く。

「おい、檜山君！　今攻撃受けてるぞ！」

「な！」

それを聞いて、檜山もあわてて携帯をとりだす。

「おい！　大丈夫かよ、檜山」

斎藤も少し焦っているようだった。

「大丈夫、まだやられちゃいけません　ただし、攻撃は続いていま
す。携帯でポチポチやってても、埒が明きませんね」

檜山はラーメンの器を持ち上げると、飲むようにしてそれを一氣
に平らげた。

「パソコン室行ってきます！　みんなも、食べ終えたら応援に来て
ください！」

そう言って走り出すと、体格に似合わずぐんぐん加速ながら食堂
を飛び出していった。

「僕たちも、食べたらすぐに向かうぞ。急げ！　敵の好きにさせる
な！」

部長が緊張した声音で指示する。

あっという間にそれぞれの昼食を食べ尽くし、パソコン室に向かって一斉に駆け出した。

少年も走った。本当に久しぶりに、本気で走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843n/>

ネットゲーム・クライシス

2010年11月6日13時05分発行